

新春に詠む短歌



猿田彦の潜る鳥居の注連縄に新藁の青さ未だ残り

水郷牛堀の上戸国神社に伝わる獅子舞を見ていた。猿田彦の被る赤い天狗面と注連縄の真新しさがよく調和していた。 市島 紀郎

初春の白磁に盛りし柚子の実が遠く忘れし黄の香はこべり

黄に熟した柚子の実が白磁の器によく映えて、柚子にまつわる母や祖母との思い出が、香によってふっと懐かしく甦ってきた。 井上 寛江

喜多院の五百羅漢に親の顔探しておればわが顔に会う

川越市の名刹「喜多院」には数百の石仏が所狭しと並ぶ一画がある。亡き親に似た顔を探していたら先に自分の顔に出会ってしまった。 宇留野 むつみ

公園の大きな水車はゆつたりと初春の光乗せて回れり

霞ヶ浦総合公園は身近な憩いの場所である。水辺の大きな水車は、湖水をたたえ、早春の光に輝きながらゆつたりと回っている。 大越 里子

木枯しよ疾風よ吹きて絡めゆけ自然の芥も世相の鬱も

世の中は今混沌とし、自然も破壊され、前途多難である。どうせ木枯しが吹くなら皆、世相のうつも、芥も吹き飛ばしてほしい。 金丸 玉貴

燦燦と新春の陽ざしにみどり児は抱かれときに小さき欠伸す

かつて産声を上げた病院で娘が里帰り出産をした。二歳半の長女に次ぎ待望の男児に恵まれ、新春に相応しい二重の喜びに溢れた。 櫻井 雅江

思いきり杉は伸びたり冬空をさえぎるものあらざる真昼

雲ひとつない大空に伸びる杉は気持ちよさそう。地上であくせくしていることが、小さく思える。今年も、少しゆつたり暮らそう。 平澤 良子

秋の陽はつるべ落としと宜へりはや黄昏て暗闇ふかし

晩秋、「秋の陽はつるべ落とし」と云いますが、正に日暮れが早くなり六時ごろには真っ暗になり、よく言い当てた表現と宜っています。 山口 節子

新春の耀く湖を白きヨット等滑るごとくに往復しおり

水郷の国民宿舎より、何隻ものヨットが、霞ヶ浦を行き来している美しい姿が見えました。 飯村 和子

九十一歳の新春迎ふ(一)の字は、何かが始まる予感を持たす

年齢に一のつく正月が十年振りにやって来た。一は数詞の始まりである。この年齢でも何か新しいことが始まりそうな予感が生まれ来る。 興津 甲種

元旦の八坂の杜は人の波幾十年を詣で来し道

元旦の八坂の杜は初詣の人々で賑わいます。子どもの頃は、深夜の鐘を聞きながら徒歩で参り、年を重ね車で詣でるようになり、初詣から始まる新しい年を前向きに生きたいと思えます。 栗山 とみ

天平の佳人のようにふくよかに憂き世の際に蓮の華咲く

泥の蓮田から思いがけず美しい花を見たとき、造化の神のすばらしさに感心させられ、今世と天上の世界を想い描きます。 佐藤 哲子

かぐやより見ゆる地球の輝きをこの身の内に抱きゆくらむ

果てしない宇宙の営みの中に生きる地球、そこに住む私たち、驕ることなく生きてゆきたいものである。 柴岡 直治

西浦の夜明け朝焼け光る波今もまなうら白帆が百千

霞ヶ浦の湖岸で育った私にとって、筑波山とともに湖面を埋めた帆掛け船の情景は忘れられない古里の風景です。 塚原 洋子

四世代集いて祝う屠蘇の膳何はなくとも先づは上じよう

四世代揃うのはやはりお正月くらいである。皆の笑顔が日頃の不平不満も消してくれる。今年もきつと良き年であらう。 山口 あさ

銀翼の下に茜の雲なびき後光放てり吾を迎えむ

オーストラリアに嫁ぎし子を訪づれる時に、棧中より見えし日の出の感動を詠む。 和希 明美

新春に詠む俳句



餅花の下で競られる青物市場

見あげる程に大きな木の枝に、沢山つけられた紅白の餅花。今年も商売繁盛を願いつつ競る人の声が市場内に響き渡る。初市は殊更、身が引き締まる。

折り鶴の一つが飛んだ初筑波

故郷に帰ってきた子ども達が仲良く千代紙で鶴を折り始めた。やがて、晴れ渡った空に向かって、「それ！飛んでけ！」、鶴は、筑波山を目指して飛んだ。

目標を一つに絞る初日記

日記をつけることは楽しみの一つである。新しい年を迎えて、やりたいことは種々とおあるけれど、欲張らずに、まずは着実に、この一つを揚げよう。

仕来りを守る男の三ヶ日

元日、二日、三日、この三日間は若水を汲み、神棚にお神酒を供え、雑煮を作る。代々伝わる風習として、今でも、男性が厨に入りこれを行う。

白鳥の白を極めし空と水

乙戸沼の良さは、四季の景観を巡る回遊式の、ウォーキングコースになっただけのこと。今年も、俳句の素材を見つながら、歩く楽しみに恵まれた。

連凧や虚空操る子の腕かいな

凧揚げは正月の風物詩。特に連凧は、風を見極め、うまく上昇気流に乗せてやれば、虚空の世界と響き合える。未来へ飛翔の子どもの顔が輝いている。

父母の皺刻む手へお年玉

慈しみ育ててくれた、悲喜こもこもを刻む父母の手。今度は、私から感謝のお年玉を上げよう。父と母はどんな笑顔を見せてくれるだろうか。

万葉の恋の一首や初硯

日々の雑事に紛れ、慌ただしい文字しか書けない現実。今年こそは心静かに、諸人の豊かな人間性を感じながら書きたい。その一つに万葉の恋歌を選ぼう。

硯海に金粉の浮き筆初め

新春の書初めをするのに墨をすつたら硯の海に金粉が浮いている。正月早々大変お目出度い事だ。

朗らかな雀の声を御慶とも

庭へ来て鳴いている雀の声を聞いていると、清々しく今年もよい年であるような気がしてならない。

見はるかす竜飛岬に初日さす

天地も凍る津軽海峡の竜飛岬。遥か離れて山頂より初日の出を拝む。静寂の淑気のなか、今年のしあわせを祈る。

四世代年ごと増ゆる雑煮椀

四世代の同居、健康で賑やかな新年を迎えられたことは、嬉しい限りで、本年も、おだやかな年でありますよう、祈らずにはいられない。

初詣修復成りし仁王尊

突然に何が起こるかわからない今の世の中、神仏の加護を祈るほかない。古い仁王尊の阿形像の修復が一年かけて完成、誠に有難く喜ばしい初詣である。

笑い皺そのほかの皺初鏡

新しい年を迎えて初めて鏡に向かい、しみじみと自分の年を思う。これからも丈夫で一日一日を大切に過したいものである。

清旦の緑茶が匂う庵の春

新年を迎えるのに会話を邪魔はない。無口の鬼面も元旦には酒を食らって、笑顔をつくり緑茶が、ことのほか美味しいと言いつつ。

元旦や家系図を背に三世代

私の知人の三世代揃った家、毎年正月とお盆には、由緒ある家系図を床の間に揚げ近親者もあつまり、団欒の一時を過ごすといふ。何とも羨ましい限りである。

山根 延子

鮎川富美子

飯田登美子

井坂 信之

市川 静江

小野 玉桂

風間 幹子

檜山 芳悠

矢野惣四郎

相澤アヤ子

佐藤てつ子

土田 信子

沼尻 芳子

藤川 祐子

古橋 初子

宮本 満子